

# ユカギールの地<sup>(1)</sup>

— W. ヨヘリソンのユカギール民族誌より —

From Waldemar Jochelson's Yukaghir Ethnography (3)

— An Annotated Japanese Translation of Chapter 1 —

遠 藤 史  
Endo, Fubito

## ABSTRACT

This is an annotated Japanese translation of “The Country of the Yukaghir” by Waldemar Jochelson (Chapter 1 of his Yukaghir ethnography, *The Yukaghir and the Yukaghirized Tungus*, Leiden: E.J.Brill, 1926). This study was the achievement of Jochelson's extensive fieldwork on the Yukaghir of Northeast Siberia, conducted in the years 1895–96 and 1901–02. The chapter deals with the former and present territory of the Yukaghir, the geographic and meteorological conditions of the territory, and the flora and fauna of the region. It serves as a compact but informative introduction to the ethnographic chapters which follow. The translator has provided a Japanese translation of the Chapter 2 of

(1) [訳者注] 本篇は民族学者 Waldemar Jochelson (1855–1937) によるユカギール民族誌 *The Yukaghir and the Yukaghirized Tungus, The Jesup North Pacific Expedition, Memoir of the American Museum of Natural History*, Volume IX, Leiden: E.J.Brill, 1926 (『ユカギール人とユカギール化したツングース人』) の第1章 (“The Country of the Yukaghir”, pp.3–15) の日本語への翻訳である。ヨヘリソンは帝政ロシアに生まれ、革命運動参加によるシベリア流刑の中で民族学に目覚め、やがてアメリカ自然史博物館の Franz Boas が主宰する the Jesup North Pacific Expedition (1897–1902) にも参加してユカギール人をはじめとするシベリア諸民族の民族学的フィールドワークを行った。その大きな成果が上記の著書であり、現在までにまとめられたユカギール人に関する唯一の包括的な民族誌である。なおヨヘリソンが現地調査を行ったのは 1895–96 年と 1901–02 年であり、特に社会的・経済的諸側面は現在と大きく異なっている可能性があることをお断りしておきたい。

the ethnography which also appeared in *The Wakayama Economic Review*. This translation is intended as a continuation of that translation.

**ユカギール人の過去と現在の居住地**—現時点におけるユカギール諸民族の生き残りが住んでいる地域、および極北地方に到達した最初のロシア人が述べているところから判断すると、ヤクーツク州の極北地域にロシア人が到達した時点では、ユカギール人はレナ川下流とコリマ川下流の間の地域全体、および（オモロン川、アヌイ川のような）東側の支流や、（ヤサーチナ川、ポボヴァ川、コルコドン川のような）南側の支流も含めたコリマ川の主要な支流の谷を占めていたと考えられよう。

東西はレナ川とコリマ川の間全地域、南北は北極海とヴェルホヤンスク山脈—この山脈はオイミヤコン高原の東部分を含む—の間の全地域が、ユカギール人の太古の居住地と考えられると言えよう。ユカギール人の主要部分が占めていたこの居住地の他にも、ユカギール人に属する諸部族がコリマ川流域東部のいくつかの場所に居住していた。たとえば大バラニハ川やアナディル（アナドゥイリ）川の谷、ベンシナ川の上流の谷などである。北極海においては、ベア島や新シベリア（ノヴァヤシビリ）島に、ユカギール人の住処の跡が見つかっている。これらの他にも、疑いもなくユカギール人の一派であるチュワン人は、コリマ川の東側を遊牧していた。はるかな過去、レナ川の西側でいったい誰がユカギール人の隣人であったのかを述べるのは難しい。レナ川とオビ川間の広大なツンドラに全く居住者がいなかったとは考えにくい。おそらくフィン系諸部族がユカギール人の最も近くに住む隣人であったのだろう。ヤクート人とツングース人はレナ川の西側のツンドラに比較的最近に現れたのであるが、サモエド諸部族のもともとの居住地は明らかにサヤン山脈であり、ここから彼らはチュルク・タタール諸民族によって北に追いやられたのである。新たな居住地でサモエド人たちはフィン系諸部族と長期間にわたる戦いを強いられたが、この戦いによってオスチャーク人の間に保存されることになった伝

続もあった。フィン人の物質文化の特徴—たとえばオスチャーク人や他のフィン系諸部族の土小屋—は、彼らの文化をユカギール人の文化と類似させるものとなっている。

レナ川の東側からそれほど遠くないオモロイ川では、まだユカギールの氏族に出会う。その個々のメンバーはたびたびレナ川の岸にあるヤクート人やロシア人の集落を訪ねている。オモロイ川の東側では、ユカギール人はオモロイ川下流に向けて北に追いやられ、そこでヤクート人・ツングース人あるいはチュクチ人と一緒に住んでいる。ロシア人がやってくる前、チュクチ人はアラゼヤ川河口とコリマ川河口の間のツンドラに住んでいた証拠がある。ロシア人が来ると、チュクチ人はさらに東に移動した。19世紀半ばになってようやくチュクチ人の一部がコリマ川を右岸から左岸に向かって越え、インジギルカ川の支流であるイェルチェン川の西に広がったのである。

現在のところ、少数の、他とは長い距離で隔てられたユカギール人の孤立した数集団が、以前のユカギール人の居住地に住みついた他の諸部族の人々の只中に住んでいる。すでに述べたように、これら新参者がユカギール人諸部族の生き残りを、北極海に注ぐ川の上流から下流へと追いやったのである。コリマ川上流の支流、ヤサーチナ川とコルコドン川流域においてだけ、今や消滅しつつあるユカギール人の3つの氏族の生き残りが暮らし続けている<sup>(2)</sup>。少数のチュワン人は、チュクチ人あるいはコリャーク人に交じって、コリマ川の東側を遊牧している。そしてロシア化したユカギール人とチュワン人の集団がアナディル川沿いの集落に住んでいる。

これらがユカギール人諸氏族の現時点での分布に関する主なデータである。個々の氏族あるいは集団の居住に関する詳細については第3章で述べる。

ユカギール人の物質文化、慣習、家族関係や社会関係に関して記述する前に、ユカギール人が居住している地の自然環境について短い記述を与えておくこと

---

(2) [訳者注] 訳者がコリマ・ユカギール語の現地調査を行うことができたのは、この地域、特にヤサーチナ川沿いのネレムノエ村においてであった。

が必要である。

**山岳と水路**—シベリア北部は、よく思われるような、北極海に向かって次第に低くなっていく低地ツンドラから成っているのではない。実際のところ、ある程度平坦なツンドラは大河の谷に限られている。シベリア北部、特に北東部にはいくつかの山地・山脈があり、それらが北に向かって次第に低くなっていくものの、いくつかの場所で北極海の海岸に到達すると、そこで高い崖を形成する。そしてさらに北極海の島々へと続くのである。

ユカギール人の居住地における主な山地・山脈について記述しよう。最も重要なのはヴェルホヤンスク山脈で、これが居住地の南限となる。その高さと同斜面の険しさのために、この山脈は過去においては、ユカギール人とその南に住む諸部族との交流にとっての障害を形作っていたにちがいない。ヴェルホヤンスク山脈はスタノヴォイ山脈の一部を形成する。ヴェルホヤンスク山脈は東経 140 度付近でスタノヴォイ山脈から分岐し、弓型をなして西に向かい、レナ川の岸まで達している。

ヴェルホヤンスク山脈は、数個の並行した尾根から成っている。それらの山脚は山脈からほとんど直角に分岐し、ヴェルホヤンスク山脈に発して北へと流れる川の分水嶺となる。ヴェルホヤンスク山脈の標高は、多くの場所でスタノヴォイ山脈の標高より高い。たとえば、ヤクーツクからヴェルホヤンスクに向かう山道は海拔 1550 メートルに達するが<sup>(3)</sup>、深い峡谷によって隔てられた木のない尾根や山頂からなる付近の山々の稜線は、山道よりさらに 250 から 350 メートル高い。この山道はヤナ川の谷の方向へと北に向かっているある程度ゆるやかな坂である。しかしヤクーツクに向かつては急峻な峡谷を成しており、トナカイだけが登れる。馬や人はこの山脈を、峡谷の上へと延び、付近の頂上から転がり落ちてきた巨石が通行の邪魔をする細い尾根を伝って越える。人はもちろん歩いていくことができるが、荷物は荷馬によって運ぶ。トナカイが行く道を辿ることは、難しく危険なのでめったに試みられることはない。荷物を積ん

(3) Jochelson, The Koryak, 本叢書の Vol.VI, p.385 を参照。

だ橇に登ったり下りたりするのは非常に危険である。山道を登るときは、橇の前につないだトナカイの他に、かなり短い紐を使って橇の後ろにも他のトナカイをつないでおく。こうすることで、橇の重みによって橇を引くトナカイが引き戻され、さらに引きずり落とされるような危険があれば、橇の後ろについているトナカイが額で荷物の重みを支えるのである。山道を下るときは、トナカイを橇の後ろだけにつなぐ。トナカイは蹄を使って雪の中に踏み止まり、橇を支える。もし橇に加速度がついたりすれば、曲がりくねった峡谷の岩に衝突してしまうだろう。このような方法で、4、5頭のトナカイが列となって首を橇につなぎ、ゆっくりと坂を下りる。橇の列はこのようにして1つずつ登り下りさせるので、全体に登り下りさせるのは丸一日かかる。トナカイを操るのは長く鋭い棒を持ったツングース人の馬方であり、彼らは山道を驚くべき機敏さで登り、氷と同じくらいに堅い雪につま先や自分の棒の先を突き立てる。下りる時には、彼らは踵と棒を雪に突く。私はこの道を2度登り(1889年と1894年)、3度下りた(1891年、1897年と1902年)。1度目は険しいトナカイの道を苦勞して登った。滑って峡谷に転落する危険は非常に大きかった。2度目は岩がごろごろしている尾根の馬用の道を登った。登りはそれほど危険ではなかったが、苦しく長かった。毎回下りるときはトナカイの道を取った。座った姿勢のまま滑り下り、脚とストックをブレーキとして使い、速度を確認し、道が曲がるところで岩に向かって突進しないように注意した。3回目に下りたのはジェサップ探検隊の際であるが、この時私はヴェルホヤンスクを経由するのではなく、スタノヴォイ山地を越えてギシガからコリマ川に達したのであった。<sup>(4)</sup>

ヴェルホヤンスク山脈から北側に出て北極海に向かう主要な山脚は次の通りである：1) レナ川とヤナ川の分水嶺を作るハララフ山地。(2) ヤナ川とインジギルカ川の間にあるタス＝ハヤフタフ山脈。(3) インジギルカ川とコリマ川の間にあるトムス＝ハヤ山脈。この最後の山脈は北緯 67 度付近で2つに分か

(4) The Jesup North Pacific Expedition (American Museum Journal, Vol.III, New York, 1903) を参照。

れている。分岐したものの一方はポロヴィノフスキ山脈と呼ばれ、コリマ川とアラゼヤ川の分水嶺を作る。もう一方はアラゼヤ山脈であり、アラゼヤ川とインジギルカ川を分ける。この最後の山脈がトムス＝ハヤ山脈の主要な分岐を成す。以上すべての山脈は北極海に向かって次第に低くなる。それらの標高の平均は400から1000メートルであり、ユカギール人の西の集団と東の集団の交流の障害となるようなものではない。子午線の方に伸びるこの川と谷の地形は交流の手段を提供している。

これら大河とその支流の谷において、私たちはツンドラのような平原と出会う。低地ツンドラの最も大きい広がり、インジギルカ川中流と下流の地域、およびアラゼヤ川とコリマ川との間の地域に見られる。これらの地域には、周囲が100キロメートルの盆状の湖から夏には干上がってしまう沼や泥池に至るまで、様々な大きさの湖沼が点在する。これらの地域の概要を述べるなら、さながら不規則な網の目を持つふるいのような印象がもたらされるだろう。すべての湖沼は、掘割に似た永続的あるいは一時的な小川により、互いに、あるいは（アラゼヤ川やコリマ川のような）大河と繋がっている。ロシア人がviskiと呼ぶこのような小川の流れは緩やかで、ほとんど気づかないほどだ。小川は沼沢地の草木で覆われており、経験のない旅人の目からは完全に隠れている。（英語では）このような流れはgrass riversと呼ばれる。けれども春には、その中には大きな川の規模を呈するものもある。

湖沼が形成されるのはその地域の地形と大量の降雪のためである。雪は時々5フィートの深さに達する。春になって雪が解けると、水は排出されるべきがない。凍りついた地面のせいで水は土壤に浸みこむことができず、平原のあらゆる窪みに溜まる。アラゼヤ川やチュクチ川のような大きな川は上述の湖沼からの小川の水を集めるけれども、それでも流れが遅く、夏期の水の蒸発がさほどのものではないので、これらの湖は残ることになる。

これらの湖沼の岸辺の大部分は低い湿地で、ブルトに覆われている<sup>(5)</sup>。しかしその中には低い泥土堤に盛り上がったものもある。湖を他の湖から隔てるのは

しばしば土手あるいは幅せいぜい2, 3メートルのブルトを持った湿地である。

これら多数の湖沼はツンドラに住む者たちに魚をもたらししてくれるけれども、その周囲にある湿地のおかげで、すでに述べた山地・山脈以上に、夏にはツンドラにおける人々の交流に対する障害となる。夏の交流は非常に困難だ。ヤクート人は鞍を用いて馬に荷を負わせるが、馬は胴体が触れるくらいまで湿地に沈み込む。一方トナカイ飼育者たちは、同じ方法で、乗用トナカイの助けを借りる。湿地のそれほど多くない地域では、コケの多い地面やブルトの上で橇を引くために、夏でさえトナカイが使われる。このような条件のもとで予想されるように、長い旅や遊牧のキャンプは夏には非常にまれである。しかし夏にツンドラを旅する別の方法がある—丸木舟あるいは薄い板を縫い合わせて作ったボートなどの、軽い舟によるものだ。漁師たちは漁をするために湖や川を行き来する。ある湖から別の湖へと湿地を横切るときには、こういった舟は漁師の肩に載せて運ばれる。

南のバイカル湖に発し、長さが4770キロメートルにもなるレナ川を除けば、レナ川の東側のユカギール人の居住地にある川はすべて、アナディル川を例外として、ヴェルホヤンスク山脈あるいはその山脚に発し、北極海に向かって北へと流れる。けれどもこの地の大河は、たとえばコリマ川、インジギルカ川やヤナ川のように、かなりの長さとなる—コリマ川は約2000キロメートル、インジギルカ川とヤナ川はそれぞれ1500キロメートルである。ここに流れる大量の水のために、海水魚はかなりの内陸まで上ることができる。このため海岸からかなり離れた地域にも漁師はいる。これらの川や谷はまた、ユカギール人の様々な集団の間の交流の手段となっている。夏は舟や筏で、冬は犬橇や雪靴で、ユカギール人は旅をする。より小さな規模の川（たとえばアラゼヤ川、チュクチ川、オモロイ川やフロマ川など）、そして大河の大きな支流（たとえばオモロン川、両アヌイ川、コルコドン川やヤサーチナ川など—すべてコリマ川の

✓ (5) [訳者注] 湿地帯の地表面に形成される小さな隆起あるいは小凸地はブルトと呼ばれる。  
ブルトは日本でも、北海道や中部山岳地帯などの高層湿原で見出される。

支流である)はまた、豊富な魚をもたらしてくれるし、旅の手段としても用いられた。

気候—ユカギール人の居住地は、シベリアの中で最も過酷な気候を有する。ここに地球上でもっとも寒い地点があるのだ。ヴェルホヤンスクの町とヴェルホヤンスク山脈の間には、冬の最も低い気温(約 $-68^{\circ}\text{C}$ 、あるいは $-90.4^{\circ}\text{F}$ )が観測された地点の1つがある。アメリカ地域の最も低い気温はバリー半島の北部で観測された( $-58.7^{\circ}\text{C}$ 、あるいは $-72^{\circ}\text{F}$ )。ユカギール人の居住地の山地・山脈は、南・西・東からの温かく湿った気流のもたらす緩和効果を遮断し、冷たい北風を直接受けるままになるような立地にある。それゆえこの地域の気候は過度に大陸性である。ヴェルホヤンスク山脈の北の地域ほど、気候が植物やヒトも含めた動物の生命に対して厳しく作用する地域は、地球上にはないだろう。北極海に面して広がった土地にはたしかに、海に近いことでいくらか和らいではいるが厳しい冬の霜がある。けれども一方で、北からの海風はかなりの程度、夏の温度を下げてくれる。

ここで、サント・ペテルブルクの自然観測局の記録から取られた、この地域の夏期と冬期の平均気温のデータをあげておこう。これらのデータは、私がこの地域で過ごした1901年に、ヤクート州の北部での気象観測所で記録されたものである。<sup>(6)</sup>表の中で、Russkoye Ustyeはインジギルカ川河口のロシア人集落、北緯71度1分。Ustyanskはヤナ川河口の集落、北緯70度55分。Verkhoyansk(ヴェルホヤンスク)は、長が住むヴェルホヤンスク地方の州都、北緯67度33分。Sredne-Kolymskは、コリマ地方の州都で、北緯67度10分。Rodchevoは、Verkhne-Kolymskから70マイル北のヤクート人集落で、北緯66度18分。Verkhne-Kolymskには気象観測所は設置されていない。<sup>(7)</sup>Nishne-Kolymskの観測結果は、完全なものではないためここではあげていない。<sup>(8)</sup>

(6) [訳者注] 表の中に記された地名との照合が容易になるように、この段落と次の段落では、地名を原書のローマ字綴りのままあげてある。ただしヴェルホヤンスクは他の段落でも頻繁に登場する地名なので、特に日本語表記を併記した。



表 1 1901 年の気象観測結果（横軸に地名、縦軸に月の名）

	USTYANSK.		RUSSKOYE USTYE.		VERKHO- YANSK.		SREDNE- KOLYMSK.		RODCHEVO.	
	Aver.	Max. and Min.	Aver.	Max. and Min.	Aver.	Max. and Min.	Aver.	Max. and Min.	Aver.	Max. and Min.
January . . .	-39.5	-23.3 -51.6	-40.1	-27.7 -51.5	-51.3	-31.6 -61.7	-42.1	-27.2 -54.2	-40.4	-29.5 -49.2
February . . .	-31.0	-12.9 -46.7	-38.2	-24.7 -51.4	-40.2	-12.7 -58.5	-40.7	-23.7 -51.8	-38.9	-27.1 -49.5
March . . . .	-22.2	-6.0 -38.1	-28.7	-14.3 -41.1	-25.1	-1.2 -46.4	-23.8	-5.2 -43.1	-23.4	-12.5 -38.0
April . . . .	-15.8	-1.1 -28.8	-18.2	-3.0 -36.7	-10.8	+4.4 -37.2	-8.4	+4.8 -25.6	-7.8	+2.7 -25.6
May . . . . .	-4.2	+7.3 -17.9	-4.7	+4.8 -19.7	+2.6	+18.5 -18.1	+3.7	+14.8 -8.5	+4.8	+15.7 -4.3
June . . . . .	+7.3	+23.4 -3.3	+6.5	+19.7 -2.7	+14.1	+28.1 -10.0	+14.5	+22.8 +4.0	+14.8	+28.7 +6.2
July . . . . .	+10.1	+25.9 +1.3	+9.1	+26.6 -0.1	+14.4	+28.0 +2.0	+13.9	+29.4 +2.1	+14.5	+27.9 +5.2
August . . . .	+5.7	+17.7 -2.3	+4.6	+17.5 -1.4	+10.5	+25.8 -3.4	+8.5	+26.8 -1.2	+10.2	+28.1 -6.9
September . .	+2.1	+15.8 -13.0	+0.6	+12.0 -13.6	+2.8	+18.9 -15.7	+3.1	+18.0 -8.9	+3.7	+19.0 -12.6
October . . . .	-14.7	-3.9 -29.5	-14.8	-4.6 -31.4	-17.7	-0.8 -42.5	-11.0	+0.0 -31.0	-11.8	+5.4 -34.4
November . . .	-28.0	-15.2 -37.0	-26.1	-15.2 -38.6	-37.7	-17.4 -49.0	-26.1	-4.6 -37.6	-29.5	-6.5 -43.1
December . . .	-27.5	-10.9 -39.2	-28.5	-17.0 -38.7	-35.9	-7.5 -50.9	-26.5	-14.7 -40.0	-26.8	-14.5 -46.4
Entire Year . .	-13.0	+25.9 -51.6	-14.9	+26.6 -51.5	-14.5	+28.1 -61.7	-11.2	+29.4 -54.2	-11.1	+28.7 -49.5

この表から、年間の最も低い気温はヴェルホヤンスク地方（Ustyansk, Russkoye Ustye, Verkhoyansk）で生じていることが見て取れよう。コリマ地方（Sredne-Kolymsk と Rodchevo）では、明らかに東風あるいは北東風の影響により、年間の平均気温はいくらか高い。と言っても、これら両地点はいずれも

✓（７）〔訳者注〕 Verkhne-Kolymsk（ヴェルフネコリムスク）はコリマ川の支流の１つであるヤサーチナ川がコリマ川本流に流れ込む河口の近くに位置する集落の名である。ここはコリマ川上流地区における当時の行政の中心地であり、ロシア正教の教会も早くから建てられていた。ソヴィエト時代になって近代的な街ズィリヤンカが若干下流に作られた後、この集落はズィリヤンカの静かな郊外として今日まで残っている。訳者も一度この地を訪れたことがある。

✓（８） Nishne-Kolymsk に関しては、Bogoras, The Chukchee, 本叢書の Vol.VII, p.24 を参照。

Ustyansk や Russkoye Ustye より海からの緩和効果から遠いところに位置しているのではあるが、年較差（つまり、年間で最も気温の高かった日と最も気温の低かった日の差）はヴェルホヤンスクで最も高い（89.9℃）。ここで、最も寒い冬と最も暑い夏が起こったのである。夏期の日較差もまた高い値に達している。表からは、最も暑い月—6月、7月や8月—toさえ霜が観察されることがわかる。したがって、栽培植物の成長に好ましい季節がいかに短いかが分かるだろう。次の表は、1901年に、Ustyansk, Russkoye Ustye, Verkhoyansk そして Sredne-Kolymsk において、霜の降りなかった日数を示している。

表2 最後の霜の日、最初の霜の日、霜のない日数（縦軸に地名）

	The Last Frost.	The First Frost.	Days without Frost.
Ustyansk . . . . .	June 10.	Aug. 21.	71
Russkoye Ustye. . . . .	June 12.	July 24.	41
Verkhoyansk . . . . .	June 8.	Aug. 20.	72
Sredne-Kolymsk. . . . .	May 28.	Aug. 21.	84

霜の降りなかった日をもっと少ない年もある。たとえば1869年にヴェルホヤンスクでは、そのような日は37日しかなかった。これらのデータから、夏に凍土が2フィートの深さまでしか溶けないような場所があるのはなぜなのか分かる。春と初夏に太陽から受け取る熱はすべて雪を溶かすのに使われてしまう。さらに年間を通じて曇りの日は夏に起こりやすいので、太陽の熱が地面に達するのが妨げられる。しかし年間の低い平均気温にもかかわらず、山地の雪線は予想されるよりもかなり高く、実際の氷河は全くない。氷河と雪線はどちらも地中に沈み込んだようであり、そこで永久に凍った層を形成する。万年雪はおそらく、北極海からそれほど遠くないコリマ川下流地域のスハルニ山地に生じている。ここは1000メートル以上の高さがある。しかし、峡谷、割れ目、山地の北側斜面のような多くの場所では、雪は夏になっても溶けず、山地の谷

においては夏でも本物の氷原が見られるということを記しておかねばならない。

川の解氷および結氷の時期の平均は、多年の観測から、次のような表にまとめることができる：

表 3 解氷日、結氷日、北緯、氷の無い / 有る日数（縦軸に川の名と位置）

	Breaking up.	Freezing.	North Latitude.	Days	
				Free from Ice.	Covered with Ice.
Lena River at its mouth . . .	June 10.	Oct. 15.	72°	127	238
Yana River at Verkhoyansk . .	May 22.	Oct. 27.	67°34′	158	207
Kolyma River at Sredne-Kolymsk	May 22.	Sept. 30.	67°10′	131	234
Kolyma River at Nishne-Kolymsk	June 9.	Sept. 29.	68°30′	112	253

1901 年における初雪と最後の雪は次のように降った：

表 4 最後の雪の日、最初の雪の日（縦軸に地名）

	The Last Snow.	The First Snow.
Russkoye Ustye . . . . .	June 10.	July 10.
Ustyansk . . . . .	June 10.	July 10.
Verkhoyansk . . . . .	June 10.	Sept. 18.
Sredne-Kolymsk . . . . .	May 22.	Aug. 21.

北極海に近いにもかかわらず、以下の 1901 年の観測結果の表が示すように、年間降雨量は多くない（〔訳者注〕表は次頁）：

最も多い降雨量は 8 月から 11 月の間に起こる。最も少ないのは 2 月から 4 月の間である。

オホーツク海の海岸で経験するような吹雪が<sup>(9)</sup>起こる海岸を除けば、特に厳しい霜の間、風はたいいてい穏やかである。たとえば上述の気象観測所では、1901 年の間、風はどこでも秒速 6.2 メートルの速度を超えなかった。一方オホーツ

(9) Jochelson, The Koryak, 本叢書の Vol.VI, p.395 を参照。

表 5 平均降水量（横軸に地名，縦軸に平均降水量，雨の日数，雪の日数）

	Verkhoyansk.	Russkoye-Ustye.	Ustyansk.	Sredne-Kolymsk.	Rodchevo.
Annual rainfall in millimetres . . .	152.5	114.2	200.9	145.0	207.5
Rainy days . . .	95	92	168	122	131
Days with snow .	63	59	105	68	81

ク海に面したペンシナ湾の岸辺では，私はかつて秒速 22 メートルの速度に達する風を観測したことがある。霜はいつも弱い風が穏やかな天気と共に起こるので，厳しい霜に耐えることは容易である。最も厳しい冬の霜の間，大気は非常に乾き，主に南西風か西風が伴っている。一方，残りの季節では風は主に北風か北西風である。

**植物相**—ユカギール人の居住地の広大な広がりにもかかわらず，その草木にはごく少数の種しかない。このことは，この地域の地理的な位置と気候の厳しさによって説明できる。植物が成長する時期が 2, 3 ヶ月しか続かないところではどこでも，植物相は豊かではありえない。木にはごく少数の種しかない。マツについては，東シベリアカラマツ (*Larix dahurica* Turcz.) とカサマツ (*Pinus pumila*) しかない。シベリアの他の針葉樹—たとえばモミ，マツ，トウヒ，シベリアカラマツ (*Larix sibirica*) —などにヴェルホヤンスク山脈の北で出会うことはない。落葉樹については，2 種のポプラ，ハコヤナギ (aspen)，カバノキ，ハンノキ，そして何種かのヤナギ (willow) に出会う。北緯 69 度は樹木の植生の北限であると考えられる。しかしコリマ川の東では北限はさらに南に下がり，チャウン湾では 68 度に達する一方，ベーリング海では 60 度を超えない。他方，レナ川河口の西では，北限は北緯 70 度まで達する。実際のところ，樹木の生育の北限は規則的な線ではないのである。というのは，地域ごとの諸条件により，樹木地帯は，概して川の谷に沿ってツンドラの中に長い岬の形で

入り込み、そして時々、北極ツンドラが樹木地帯に切り込んでいるからだ。さらに、樹木の北限の南にも散発的に、北極圏と性質や植生が似た樹木なしのツンドラの大小の広がりが見出されている。最も北にまで到達した木は東シベリアカラマツである。一方、ポプラ、ハコヤナギ、カバノキ (*Betula alba*) はより南の川の谷に見出される。カサマツ (*Pinus pumila*) は山の斜面に見出される。<sup>(10)</sup>

東シベリアカラマツの北に見ることができるのは、曲がりくねって成長が阻害されたような矮性のカバノキ (*Betula nana*)、北極ヤナギ、*Andromeda*、ガンコウラン、および *Ledum palustre* L. だけであり、これらはごつごつした幹をコケや地衣類の覆いの下に隠し、上方に向かっては小さな弱い枝しか伸ばさない。この地域は北極海の海岸まで広がっている。この地域の大部分は湿地であり、この湿地は夏に多少の深さ（約2フィート）まで解け、コケに覆われ、その中にホロムイイチゴ (*Rubus chamaemorus*)、クロマメノキ (*Vaccinium uliginosum*)、コケモモ (*Vaccinium vitis idaea*) およびガンコウラン (*Empetrum nigrum*) などが生育する。より乾いていたり、石が多かったり、小高いところでは、ツンドラは様々な種の地衣類に覆われ、トナカイがこれらを食べる。しばしばコケの多いツンドラは地衣類に覆われた場所と交代する。ツンドラの中には、Gramineae, Cyperaceae, Rosaceae, Cruciferae その他の顕花植物でにぎわう場所もある。カヤツリグサ科の草が丸くコケの多いブルトを覆っている状態は、湿地のツンドラで見られる。

樹木の植生の北限の南においては、山地、山道および海拔 300–400 メートルより高い土地は、このような北極ツンドラにあらゆる点で一致するツンドラによって覆われている。

ユカギール人の居住地の残りの部分は、樹木の生育の北限から、南はヴェルホヤンスク山脈の斜面に至るまで、東はスタノヴォイ山地を越えるまで、もっ

---

(10) オホーツク海の海岸における樹木の植生の特徴と限界については、Jochelson, The Koryak, 本書の Vol. VI, p.401 を参照。

ばら主に東シベリアカラムツによって作られた森に覆われている。この地域のより南になると、ポプラ、ハコヤナギ、カバノキが現れる。川の谷に見られるのは完全にポプラからできている森や、カバノキの森である。ユカギール人の居住地の南の部分では、カラムツやポプラがかなりの大きさに達し、幹の周囲が約3メートルあるいはそれ以上のものに会うこともある。このような木々は、たとえばコルコドン川の谷に生えている。さらに南に向かうにつれて植生はより豊かに、より多様になる。大木のサイズに達したヤナギも見られる。コリマ川上流地帯では、*Prunus padus*、ナナカマド、3種のスグリの茂み、ラズベリー (*Rubus idaeus* L.)、野バラ (*Rubus arctica*) などが見出される。カバノキはかなりの大きさになる。犬橈やトナカイ橈を生産するために、カバノキは彼らの居住地の南部から北部に運ばれる。ロシア型の丸太小屋を建てるために、カラムツで作った筏が川を流れ下る。ポプラの木の幹は、丸木舟を作るのに使われる。

ベリー類はこの地域に住む者の食物の重要な部分をなしている。ユリ属の植物の根も食べられる。カラムツの樹皮の内側や赤ポプラの樹液も同様に、食物として使われる。

全体的に言って、この地域の植物相はほとんど知られていない。しかし手持ちのデータから判断して、この植物相は、内生の植物が欠けていることによって特徴づけられる。このことは氷河期における氷と水の覆いからこの地域が解放された時期が遅いことによる。他方、かつてアジアとアメリカが地理的に続いていたことにより、いくつかのアメリカの植物がアジアに移動してきている。たとえばミッデンドルフ (Middendorff) はタイミル半島およびチュクチ半島の Nordenskiöld で、旧世界と新世界の北極圏に特有のかなりの数の種を発見している。

**動物相**—人間にとって有用な動物については、家畜化された動物、狩猟、漁撈および毛皮取引についての諸章で述べる。ここでは、野生動物のうち最も重要な種についての短い考察に話題を限ることにしよう。

ヒグマ (*Ursus arctus*)<sup>(11)</sup> は、サケが山中の浅い沢に多数遡上してこの動物の豊富な餌となるカムチャツカやコリヤーク人の居住地ほど数が多くない。ユカギールの地では川は一般に長く、深く、大量の水を湛える。一方、クマだけが魚を捕れる山中の浅い流れでは、魚は少ない。ヒグマは主に森林地帯に住んでいる。しかし夏にはベリーを求めて、あるいは羽毛が抜け変わる時期には飛べない水鳥を捕りにツンドラに現れるものもあり、蚊を避け野生トナカイを捕りに山に登るものもある。ホッキョクグマ (*Ursus maritimus*) は、島に住んでいるか、あるいは北極海の浮氷に乗っているために、めったに陸地に現れない。チュクチ人が上着を飾るために用いるクズリ (*Gulo borealis*) は、猟師によって根絶やしにされ、今日では稀にしか出会うことはない。クズリより価値の高い毛皮用の動物であるクロテンは、17世紀の終わりには、公的な記録によれば、スレドネコリムスクの市で一度に36,000頭が売られたということだが、ユカギール人の居住地ではかなりの程度根絶やしにされてしまった。コリマ地方のクロテンは最上の物と考えられていたのである。事実上絶滅させられた動物にはオオヤマネコ (*Felis lynx*) を加えてもよい。ユカギール人はかつて毛皮の衣をこれで飾ったのである。この地域に稀な動物にはカワウソ (*Lutra vulgaris*) も含まれよう。オオカミ (*Canis lupus*) はトナカイを捕るためにもっぱら平原にいる。それゆえオオカミに最も頻繁に出会うのはツンドラや、山地の森の境や、樹木の生育の北限近くである。キツネ (*Canis vulpes*) は、以前ほどの数ではないが、彼らの居住地のどこでも出会う。一方ホッキョクギツネ (*Canis lagopus*) は主にツンドラに住み、ネズミやレミングを餌としている。より小さい食肉目に関しては、この地域にはオコジョ (*Mustela eriminea*) やイタチ (*Mustela vulgaris*) がいる。非常に一般的なのはオコジョであり、イタチはそれと比べると出会うことが少ない。

齧歯類については、その毛皮がかなり輸出されているが、森林地帯だけにリ

(11) [訳者注] 原文では black bear (ツキノワグマ?) と書かれているが、学名の意味するところを優先し、「ヒグマ」(*brown bear*) と解釈して訳した。

ス (*Sciurus vulgaris*) が住む。森にはまた、数はより少ないがモモンガが見られる。他の齧歯類としてはホッキョクウサギ (*Lepus timidus* Linn.) に多数出会う。

シカ科の動物については、ヘラジカ (*Cervus alces*)、トナカイ (*Cervus tarandus*)、そして山地にはジャコウジカ (*Moschus moschiferus*) が見られる。

山地にはまた別の反芻動物であるオオツノヒツジ (*Ovis nivicola*) がいる。ユカギール人の居住地の全体にわたってパラスジリス (*Eutamias asiaticus*)、シベリアマーモット (*Arctomys*)、そしてシベリアジリス (*Citellus*) を見ることができよう。シベリアジリスはヤクート人が食用に用いている。黒いネズミ・ヤチネズミやレミングには数種が存する。私がニューヨークに持って行った小哺乳類のコレクションの中に、アレン教授は2つの新種を見つけた—コリマヤチネズミ (*Evotomys Fochelsoni*) とコリマナキウサギ (*Ochotona Kolymensis*)<sup>(12)</sup> である。コウモリはヴェルホヤンスク山脈の北、ヴェルホヤンスクで見られた。

ユカギール人が家畜としている動物は、(橇引きや狩猟のための) 犬とトナカイだけである。しかしユカギール人の居住地にかなり遅くになって—約 200 から 300 年前に—やってきたヤクート人は馬と(有角の) 牛を連れてきた。ヤクート人の中に、100 頭、時々はそれ以上にもなる馬の群れや、牛の群れを所有する者を見ることがある。しかしこれらを育てるのはかなりの苦勞である。馬や牛を首尾よく育てるための最大の障害は草の質の悪さであり、その中には馬に有害な草も含まれている。働いていないときや、あるいは干草が手に入らない荒地に長い旅をするときには、馬は野生のライ麦やトクサやカヤツリグサの硬くしぼんだ茎を求めて、蹄で地面の雪をかき取る。穀物や他の栄養のある飼葉がないため、これらの馬は、時々めざましい忍耐力を示すものの、たや

(12) J.H.Allen, Report on the Mammals collected in North-Eastern Siberia by the Jesup North Pacific Expedition (Bulletin American Museum of Natural History [New York, 1903], Vol. XIX, pp.148, 154 を参照。



すく力尽きたり、瘟疫その他のよくある伝染病にかかったりしてしまう。もっと困難なのは、冬の9カ月の間干草なしでは生存できない牛を首尾よく育てる方法である。北極圏の草からは質の悪い干草しかできないし、干草作りに適した場所はほとんどない。この地域全体が森あるいはツンドラから成っていて、干草作りに適した短い時期は同時に漁撈の時期と重なってしまうからである。働き手の少ないこれらヤクート人の家族は、短い夏の間、漁撈と干草作りの両方を行うような時間を見つけることはできない。その結果、彼らはこれら2つの仕事のどちらかを選ばなくてはならない。魚の供給は冬のための食糧を保証してくれることになるので、彼らは前者の仕事の方を好むのである。

おそらくはこのために、ユカギール人は牛の飼育をヤクート人から取り入れなかったであろう。ユカギール人の居住地の南部地域では一たとえば、牧草が他の地域より良いコリマ川の上流では一彼らはそうしたかもしれないからである。ヤサーチナ川流域のユカギール人の中にはリス狩りの季節にヤクート人から馬を借りる者もいるが、コリマ川流域のユカギール人の中には誰も馬や牛を所有していない。ヤナ川やオモロイ川流域のごく少数のユカギール人だけが馬や牛を持っているけれども、これらの人々は完全にヤクート人に同化されてしまっている。家畜化されたヒツジ、ヤギ、ブタなどはまだユカギール人の居住地には知られていない。ヒツジとヤギを飼育しようとする試みは、より南部では成功しなかった。しかしながらブタは、ロシア人の開拓者や宗派の流刑囚によってヤクーツクの街、およびヤクーツク近くのパヴロフスクという集落で飼育されている。

極北地域ではある種の鳥が重要な食物となる。ライチョウと湿地に住む2種のフクロウが1年を通じて見られる。渡り鳥に関しては、2種のハクチョウ、4種のガン、そして15種のカモがいる。

海水魚は春と夏に川を上り、それぞれの季節の末には川の上流から河口へと、あるいは海へと川を下る。この点でこれらの海水魚は、コリャーク人の居住地に見られるような、海に生きて戻ることなく産卵後死ぬオホーツク

海の魚とは異なる<sup>(13)</sup>。それゆえユカギール人の居住地では、漁撈の時期は2回ある—第1の時期は魚が川を上るときであり、第2の時期は魚が戻る時である。回遊魚は主に Coregonidae の数種、たとえば *Coregonus leucichtys*, *C. Ormul*, *C. muksun* および *C. clupeoides* からなる。一方 *Oncorhynchus* 属のサケは、オホーツク海やベーリング海の海岸における現地民の主な捕物である<sup>(14)</sup>。これらはユカギールの地の川ではめったに出会うことがない。ユカギール人は私に、サケ (*Oncorhynchus Keta*)<sup>(15)</sup> はしばしば少数コリマ川に入ってくると語ったが、私はそれを見たことはない。回遊魚にチョウザメとスターレット (コチョウザメ) を付け加えてもよからう。次の川魚および湖の魚が見られた: *Coregonus nasutus*, *C. lavaretus*, *C. pellet*, *mundu* と呼ばれる小さな湖の魚 (*Salmo perunurus*), *Thymallus vulgaris*, *Salmo coregonoides*, *Esox lucius*, *Perca fluviatilis*, *Lotha vulgaris* および *Carassius vulgaris* である。この最後の魚はより南の湖でのみ見られた。海に非常に近いツンドラの湖には少数の種のタイセイヨウサケがいて、重さは2から3キログラムになり、サケに似ていてユカギール人には *nogieñ* と呼ばれ、ロシア人には *zubatka* と呼ばれる。この種の魚が見られる湖は海とは繋がっていないが、ユカギール人はしばしば海から河口に入ってくるこれを海水魚と考えている。それゆえこのことは、これらの湖がかつては海の一部であったという事実によるものに違いない。

【謝辞】 この翻訳を作成するに当たり、訳者の数回の現地調査の際、訳者を暖かく迎え入れてくださったネレムノエ村の皆様方に感謝申し上げます。またこの翻訳は以下の科学研究費補助金による研究助成の成果の一部です：文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (B) 「北東アジア諸言語の統合性をめぐる類型的・歴史的比較研究」(課題番号 21401022) よび同基盤研究 (C) 「コリマ・ユカギール語の統語構造と情報構造の関連究明による統語論記述の精緻化」(課題番号：22520434)。

(13) Jochelson, *The Koryak*, 本叢書の Vol.VI, p.525 を参照。

(14) 同書, pp.525-534。

(15) [訳者注] 日本で一般に言うサケ (シャケ) はこの種のことである。